呪いの時代　内田樹

20年ほど前、まだ僕が学会というところに顔を出していた頃までは、学会発表後の質疑応答で、「あなたは……の論文を読んでいないのではないか」とか「周知の……についての言及がないのはなぜか」といった、「そこで論じられていないこと」を持ち出して、「こんなことも知らない人間に、この論件について語る資格はない」と切り捨てる態度に出る学者がたくさんいました。僕はそういう「突っ込み」を見るたびに、どうして彼らは「自分の知っている情報」の価値を高く格付けする一方、「自分の知らない情報」が知るに値しないものだとあれほど無邪気に信じていられるのか、その理由がよくわかりませんでした。僕たちは誰でも**自分の知っていることの価値を過大評価し、自分の知らないことの価値を過小評価する傾向にあります**。誰でもそうです。だから、学者にとっていちばん最初の仕事は、自分の所有する学術情報の価値を適切に「評価すること」であるはずです。でも、「君は『こんなこと』も知らんのか」と気色ばむ学者たちは「こんなこと」が議論の始点になければならない理由について、ほとんど説明責任を感じていないようでした。

でも、自分の知性の機能について気配りの行き届いた学者なら自らにまずこう問うはずです。

私はなぜあることを知っていて、それとは違うことを知らないのか？　私が何かを「知りたい」と思い、また別の何かについては「知るに値しない」と思うのは、どのような選別の基準に従っているのか？　その選別基準には一般性があるのか？　あるとしたら、その一般性はどのように学的に基礎づけられるのか？　などなど。そういった一連の問いは「私の知の成り立ち方」について考究することへ僕たちを導きます。それが「知識についての知識」をかたちづくります。

学者というのは「知識を持つ人間」ではなく、「自分の持つ知識についての知識を持っている人間」のことだと僕は思います。ですから、自分の知っていることは「知るに値すること」であり、**自分が知らないことは「知るに値しないこと」だと無反省的に信じ込める**学者のことを僕は端的に「**学者の腐ったようなやつ**」と呼んでいました。

ネット論壇で頻用される「こんなことも知らない人間には、この論件について語る資格はない」という切り捨て方はこの手の「学者の腐ったようなやつ」のやり方をそのまま踏襲しています。そのタイプの書き手が今ネット上に数十万単位で出現してきているのを見て、僕はまことに気鬱（きうつ）になるのです。

ネット上では相手を傷つける能力、相手を沈黙に追い込む能力が、ほとんどそれだけが競われています。もっとも少ない言葉で、もっとも効果的に他者を傷つけることのできる人間がネット論壇では英雄視される。それが「もっとも少ない貨幣でもっとも高額の商品を買うこと」が消費者としてのパフォーマンスの高さとして賛美される消費社会のメカニズムをそのまま模写していることにたぶん彼らは気づいていない。

10年がかりで築き上げた信頼関係でも壊すのはわずか10秒で十分です。100年かけて築かれた都市が一夜で灰燼（かいじん）に帰すのと同じです。あるものを破壊するのに要するエネルギーは、それを創り出すために要したエネルギーの数百分の一、場合によっては数百万分の一で済みます。

ですから、身の丈に合わない自尊感情を持ち、癒されない全能感に苦しんでいる人間は創造的な仕事を嫌い、それよりは何かを破壊する生き方を選択します。必ずそうなります。

「……を叩き潰せ」「……を打倒せよ」「……を一掃せよ」というのは、そういう人たちが選好する言葉づかいです。**破壊する者の側に回れば、自分よりも遥かに社会的に実力がある、上位の人間と対等の立場立つことが、場合によってはそれより上位に立つことさえ可能**だからです。

誰でも「文学とは何か」というような抽象論をそれらしく語ることはできます。「こんなものは文学じゃない」と斬って捨てることもできます。でも、**「これが私の作品です。この作品で私という人間を判断してくださって結構です」と言い切ることはなかなかできません。**

だから、**全能感を求める人はものを創ることを嫌います**。創造すると、自分がどの程度の人間であるかがあからさまに暴露されてしまうからです。だから、全能感を優先的に求めるものは、**自分に「力がある」ことを誇示したがるものは、何も「作品」を示さず、他人の創り出したものに無慈悲な批評を下してゆく生き方を選ぶ**ようになります。自分の正味の実力に自信がない人間ほど攻撃的になり、その批評は残忍なものになるのはそのせいです。

高い自己評価と低い外部評価の落差を埋めるためには、ふつうの人は外部評価を高めるために努力します。けれども中には外部評価を「高める」努力とは違うかたちで高い自己評価を維持しょうと試みる人たちがいます。

例えば、**「引きこもり」**というのは、**自分に対して低い評価を与える外部を遮断して、「評価されない立場」に逃げ込む**というソリューションです。転職や離職の繰り返しや、いっとき流行した（もう廃れたことを願いますが）「自分探しの旅」も、自己評価と釣り合うような格付けをしてくれる「外部」がこの世界のどこかにあるはずだという（あまり根拠のない）信憑に導かれてのものです。

もともと学校教育の機能の一つは、子どもたちの無根拠に高い自己評価を、適切に下方修正し、身の丈に合った生活設計やキャリアに軟着陸させることにありました。「身の程を知れ」ということです。

でも、現在の教育現場では「君たちには無限の可能性がある」という激励は許容されても、「身の程を知れ」、「分をわきまえろ」というアナウンスに対してはつよい抵抗を覚悟しなければなりません。

「努力しても意味がない」という言葉を、あたかも自分の明察の証拠であるかのよう

に繰り返し口にさせ、その言葉によって自分自身に呪いをかけるように仕向けるのが、格差の再生産の実相なのです。

・「祝福する」――難しい説明

現に羨望や嫉妬や憎悪はさまざまなメディアにおいて、生身の個人を離れて、言葉として一人歩きを始めています。誰にも効果的に抑制されぬまま、それらの言葉は人を傷つけ、人々がたいせつにしているものに唾を吐きかけ、人々が美しいと信じているものに泥を塗りつけ、叩き壊すことを通じておのれの全能感と自尊感情を満たそうとしています。ネット上の掲示板に繰り返し「死ね」と書かれて、それに耐えきれず自殺する人々が毎年何十人（何百人かも知れません）となくいます。もし、**言葉が空を飛んで、現実に人を撃ち殺すことを「呪い」と呼ぶなら、これは間違いなく呪殺**です。僕たちはもしかすると平安時代以上に多くの人が呪殺されている時代に生きているのかも知れません。

この**「呪いの時代」をどう生き延びたらいいのか**。その答えの一部はすでに書きました。それは生身の、具体的な生活のうちに捉えられた、あまりぱっとしないこの「正味の自分」をこそ、真の主体としてあくまで維持し続けることです。「このようなもの」であり、「このようなものでしかない」自分を受け容れ、承認し、「このようなもの」にすぎないにもかかわらず、けなげに生きようとしている姿を「可憐」と思い、一掬の涙をそそぐこと。それが「祝福する」ということの本義だと思います。

つまり、現代人が自我の中心に置いている「自分らしさ」というのは、実はある種の欠如感、承認要求なのです。「私はこんな所にいる人間ではない」、「私に対する評価はこんな低いものであってよいはずがない」、「私の横にいるべきパートナーはこんなレベルのものであるはずがない」というような、自分の正味の現実に対する身もだえするような違和感、帝離感、不充足感、それが「自分らしさ」の実体です。

絶対不敗のウェポン

「自分らしさ」というのは、「今の自分は『ほんとうの自分』　ではない」という否定形でしか存在しません。ですから、彼らが「自分探し」というときに探しているのは実は「自分」ではない。彼らが探しているのは、彼らの欠如感、不充足感を充たしてくれるよう他者です。「自分」を探しているのではなくて、「自分」を支えてくれる土台、壁、屋根を探している。**土台や壁や屋根が揃えば、「そこの住人」としてのアィデンティティーが安定的に基礎づけられると考えている**。どこかに行けば自分のための壁や屋根があるんじゃないかと思って、旅をしたり、留学したり、離職したり、パートナーを次々に変えたりする。自分にジャストフィットする「容れ物」を探している。「自分のためだけに取っておかれている、この世でたった一つの仕事、たった一人のパートナー、たった一つの使命」を求めている。

自然科学の仮説は、どれほどできのよいものであっても、局所的にしか妥当しない。これは学問の前提です。社会理論の場合でも同じです。ある歴史的状況、ある政治的状況、ある地政学的状況の中では、うまく妥当するけれど、条件が変わると適用することがむずかしい理論というのはいくらもあります。局所的に妥当する理説は、「ローカルな真理」として、その他の「ローカルな真理」とコラボレーションすれば、十分に使いでがある。僕はそう思っています。けれども、「普遍的に妥当しない理論はダメだ」という立場を取る人が学者の中にもいる。

・・・

反証事例を出すこと自体は理論の深化にとって喜ばしいことです。けれども、いつのまにか反証提出がある種の倫理的告発の様態を帯びてきていることは知的生産については危険なことです。**例外中の例外のような「反証事例」を持ち出して、それが勘定に入っていないから理論としてダメだという切り捨て**方が社会学の周辺で発生したのは 80 年代のことですが、これが今やあらゆる領域に広がっています。

僕はもともと「ディベート」というものが嫌いですけれど、それはそこでは「ディベートの勝者」の主張のレベルを超えるような知見が決して生み出されないからです。複数の人間が集まって、何時間か侃々諤々の議論をして、その結論が、「ディベートの勝者一人以外はいなくてもよかった」というものであったら、あまりに悲しい。

僕たちが現在使っている「社会」「個人」「哲学」「倫理」「科学」といった社会科学・自然科学の用語のほとんどすべては、この時代、わずかな期間のうちに、加藤弘之、西周、福沢諭吉らによって騎虎（きこ）の勢いで外国語から翻訳されたものです。

どうして、そんなことが可能だったのか。それは日本に古代以来の「翻訳文化」の蓄積があったからです。中国から輸入した漢典を次々と翻訳してきた 1000 年来の伝統がある。夏目漱石は漢学から英語に転じてわずか数年で『方丈記』を英訳しました。みごとな英語だそうです。森鴎外は膨大な数の著作を残していますが、量的にいちばん多いのは翻訳です。中江兆民はルソーの『社会契約論』を漢訳しています。兆民は日・仏・漢のトリリンガルだったわけです。

「翻訳文化」の伝統

これは僕の勝手な想像ですけれど、この時期の翻訳者たちは欧米のテクストをとりあえず「漢訳」して読んでいたのではないかと思います。ベースになる構文の統辞的構造は日本語ですが、そこに「外来の概念」を載せる。この処理プロセスだけについて言えば、中国語が相手でも英語が相手でも変わらない。欧米の概念をうまく受け止めることのできる**漢語 2 字を思いつけば、そこで翻訳の大きな山場は越せる**。そして、漢語はもともと外国語ですから、それが「あまりぴんとこない」語であっても、特に違和感はない。**そのまま「よく意味のわからない術語」が日本語の中に入り込んでくる**。「哲学」とか「概念」とかいう語を最初に見た読者は「よく意味がわからなかっ

た」はずです。でも、使っているうちに、だんだんと「ああ、こういうふうに使えばいいのか」ということがわかってくる。これをはじめからひらがなの「やまとことば」で訳そうとしたら、大事業です。

就活を始めるに当たって最初叩き込まれるのが「**適職イデオロギー**」です。就職情報産業の営業マンがやってきて、大学 2 年生を講堂に集めて「空気を入れる」ときに彼らはこう言います。「諸君ひとりひとりには、この広い世界のどこかに、ただひとつだけ適性に合致した『天職』がある。これから 1 年余りのうちに、諸君は自分の適性に合致したこの職業に出会わなくてはならない。そのために捧げうるだけの時間とエネルギーを就括に投じなければならない」

学生たちはびっくりしますけれど、だいたい根が素直な子たちですから、たちまち「タブラ・ラサ」に墨汁を落とされたように、この「適職イデオロギー」に染め上げられます。

そして、自分が適職に出会えないのは、「自分の適性が何であるかにまだ気づいていないからだ」ということと、「世の中にどのような職業があるのかについてまだ十分に知らないからだ」という 2 種類の「情報」不足によって説明されるということに、うっかり額いてしまう。そうして適性試験を受けたり、目を赤くして就職情報誌に見入ることになるわけですが、もちろんこれらの情報は無償ではありません。かの「適職イデオロギー」を宣布してまわった営業マンの会社が課金して販売している商品なのですから。

・・・

この「適職イデオロギー」というのはきわめて強烈なもので、これを一度受け容れてしまうと、学生たちは「ほんとうに『こんな仕事』に就いていいのだろうか」という不安から逃げられなくなります。就活中ももちろんですが、実際に内定をもらったあとも不安が鎮まらず、さらに就活を続ける学生がたくさんいます。

・・・

問題は「適職イデオロギー」は就職した後も引き続き彼らを苦しめ続けることです。というのも、実際に働き始めると、仕事は彼らが想像していたものとはまるで違ったものだからです。新入社員にそれほどわくわくするようなクリエイティブな仕事が与えられるわけがありません。たいていは誰でもできるような面白くもない作業を命じられる。ぶ厚いリストを片手に「国債買いませんか」と電話営業したり、「おたくの店で買ったコート、ボタンの糸がほつれてるわよ」と怒鳴られて 2 時間かけて自宅まで代替品を持参したり（いずれも実話)、どう考えても、この仕事をするためにこそ就職した「天職」だとは思われない。そうなると、「適職イデオロギー」を注入された若者たちが「これは私の天職じゃない。私の天職はどこかにある」と次の就職先を探したくなっても、これはとどめることがむずかしい。

もちろん、就職情報産業はそういう若者たちを見逃しません。「適職が見つからないのは情報が十分ではなかったからです。ご自身の適性について、就職先について、情報が足りなかったからです。だいじょうぶ。やり直しは可能です。必要な情報ならいくらでも提供しましょう。ただし有償ですけど」

就職情報産業にとって、「適職イデオロギー」を深く内面化した若者たちはいわば

エンドレスの顧客です。「私だけのための天職」がこの世にあると信じてしまった若者は、もう決して一箇所にとどまることができません。ジャストフィットする職場を探して、終わりなく転々とすることになる。

「運命の
赤い糸で結ばれた宿命の配偶者幻想」です。世界のどこかに私だけに宿命づけられたたった一人の配偶者がいる。その人に出会わなければならない。出会いさえすれば永遠の幸福が約束される……この「**赤い糸イデオロギー**」は幼児期からさまざまな物語を経由して、子どもたちに植え付けられます。この幻想から自由であることはきわめて難しい。

そのイデオロギーに棹さすかたちで結婚情報産業が呼びかけます。「この世の中に、あなたにだけ約束された運命の人がいます。あなたはまだその人に出会っていません。なぜでしょう？　それは『出会い』が足りないからです。私たちが、その出会いを提供いたしましょう。もちろん有償」

婚活では就活における「情報」が「出会い」という言葉に置き換えられている。違いはそれだけです。**「婚活」は、「就活」のビジネスモデルの使い回し**なのです。現に、「婚活」業界を牽引しているのは就職情報産業です。ビジネスモデルが同型なんですから、当然です。「出会い」という言葉でソフト・コーティングされていますが、ありていに言えば、「あなたが不幸なのは情報が不足しているからです。必要な情報が欲しければお金をご用意ください」ということです。

・・・

ともかく、「赤い糸イデオロギー」はそのダークな裏面として、「ほんとうにこの人が『赤い糸』で結ばれているという当のその人なのであろうか」という深刻な疑いを伴います。そして、この疑いを払拭することは原理的に不可能なのです。ですから、いちど「赤い糸イデオロギー」を内面化してしまった男女は、そのあと「この人と残る人生をともに過ごすことがほんとうに私にとって宿命なのであろうか」というエンドレスの不安にとりつかれることになります。

「就活」ビジネスが、新卒の就職先だけでなく、離職転職についての情報提供でもコミッションを稼いでいるように、「婚活」ビジネスはもちろんその副業として「にこにこ離婚相談」カウンセリングやタフ・ネゴシエーションのための弁護士紹介といった離婚ビジネスも併行して手がけています（当然ですね）。

つまり、「婚活」ビジネスというのは、一度でも「赤い糸で結ばれた世界でただひとりの人がいる」というイデオロギーを内面化してしまった人間に対して生涯にわたって、結婚に関わる全ての活動に課金できるシステムなわけです。まことにアクマのような狡知と言うべきでありましょう。

人格的にすぐれた二人の人間が心から愛し合い、尊敬し合っていなければ、幸福な結婚ができないというような苛酷な条件を課していたら、人類は遠い昔に絶滅していたでしょう。

・・・

結婚というのは普通の人たちが、別に「赤い糸」で結ばれていなくても、卓越した人間的資質がなくても、生涯変わらぬ激しい愛情なんかなくても、そこそこ幸福に過ごせるようなシステムとして設計されている。そのようなものとして設計されていなくては困る。

そのためには、「運命の赤い糸で結ばれた宿命の配偶者と生涯にわたって熱烈に愛し合い続ける（愛に翳りが生じたら、即離婚）」というようなタイトな条件を課すよりは、「誰と結婚しても、そこそこ幸福になれる」能力の涵養に教育的リソースを投じるべきだと僕は思います。**「誰としたって、まあ、似たようなものだよ」**というゆるい結婚観をひろく社会的に採用し、その上で、**「どんな相手と結婚しても、そこそこ幸福になれる力」を身につけさせる**ことに教育資源を集中する。それが成熟した社会における結婚のありようではないか、と。僕はそのように思うのであります。

「結婚できる能力」

あらゆる結婚は（と申し上げてよろしいでしょう）「これは失敗だったな」という感覚を当事者たちにもたらします。必ず。だから、ご心配には及びません。**僕たちは配偶者の選択において、必ず間違いを犯します。そして、後になって「なんで、こんな人と結婚しちゃったんだろう……」と虚空を仰ぐことになる。**「婚活」ビジネスは、この「失敗の不安」を煽り立て、それがあたかも致死的なものであるかのように思い込ませることで、「より多くの出会い」　への需要を生み出している。僕はそれが「よろしくない」と申し上げているのです。

・・・

結婚が必要とするのは、「他者と共生する力」です。よく理解もできないし、共感もできない他人と、それにもかかわらず生活を共にし、支え合い、慰め合うことができる、その能力は人間が共同体を営んでゆくときの基礎的な能力に通じていると僕は思います。

日本社会の深刻な問題は、他者との共生能力が劣化していることです。

自分と価値観が違い、美意識が違い、生活習慣が違う他者を許容することのできない人が増えている。**社会人としての成熟の指標のひとつは他者と共生できる能力、他者と協働できる能力**です。この能力を開発する上で結婚というのはきわめてすぐれた制度だと僕は思います。とりわけ、**配偶者が示す自分には理解できないさまざまな言動の背後に、「主観的に合理的で首尾表した秩序」があることを予測**し、それを推論するためには、想像力を駆使し、自分のそれとは違う論理の回路をトレースする能力を結婚は要求します。もちろん、配偶者を「まったくランダムに思考し、思いつきで行動している人」と思いなすこともできないわけではありません。でも、現実にはそんな人間は存在しません。あらゆる人間のあらゆる行動は、「主観的には首尾一貫したロジック」によって貫かれているのです。ですから、配偶者のうちなるこの「ロジック」を**おのれの全知全能を尽くして見出そうという努力が結婚生活において最優先の仕事**になります。

この仕事が開発する能力は単に結婚生活を支援するにとどまらず、きわめて汎用性の高いものです。というのは、一見するとランダムに生起する事象の背後に反復する定常的な「パターン」の発見こそ、知性のもっとも始原的な形式だからです。地面に

座り込んでじっと蟻の行列をみつめている子どもや、路傍の雑草に見入っている子どもや、砂浜で寄せては引く波を数えている子どもは、そこに繰り返される「パターン」の気配を感じて、全身の感度を最大化しています。自分の「仮説」が正しければ、次にあの「パターン」が再帰するはずだ……そう予測しながら自然物をみつめているときの子どもはすでに小さな科学者です。そして、すべての事象の背後には世界を整序する美しい語調があるはずだという同じ確信のことを僕たちは「信仰」とも呼びます。つまり、ランダムに見える事象の背後に一定のパターンを見出そうとする知的努力によって人はまっすぐに科学と宗教に向かうのです。**結婚が人間的成熟の捷径であるという理路**がこれでお分かり頂けたでしょうか。

草食系男子の特徴は、とにかく「弱い」ということです。きわだった特徴は「すぐ泣く」。それから物を決めるのが苦手。「どこに行く？」とか「何、食べる？」とか訊いても答えられない。できることなら女の子に全部決めてもらいたがる。身体的には細身。お酒落で、髪の毛の手入れと美肌に関心が高い。かわいいしぐさ（胸の前で両手を組んで、口をとがらすとか）が得意で、外見的には哺乳類の幼生、なかんずく齧歯類に通じる風貌をしている。家族と仲が良く、とくに母親との関係が親密。

何を言われても傷つくか、何を言われても反応しないか、その二極の間を揺れ動いている。「逆ギレ」というのも同じ頃から社会的行動に登録されたものの一つです。それまで相手に穏健な気遣いを示していた人が、ある瞬間を頓にしていきなり凶悪で利己的な態度に転じることです。

ここに共通するのは「ペルソナ」の使い分けができなくなったということです。二極を揺れ動くというのは、社会的「ペルソナ」が 2 種類しかないということです。**「ペルソナ」というのは、一言で言えば、人間関係の中で、過剰に他者を傷つけない、過剰に傷つけられないための防衛システム**です。他人の攻撃から身を守ると同時に、自分が他人に加える攻撃を抑制する。ペルソナは双方向の暴力をコントロールするための装置です。

攻撃性のコントロールは容易ではありません。完全に抑圧してしまうと、かえって思いがけないかたちで暴発する。**ひとりの人間が抱え込んでいる攻撃性の絶対量は変わらない**

かつて青島幸男は「ぜにのないやつぁ俺んとこへこい　俺もないけど心配すんな見ろよ　青い空　白い雲　そのうちなんとかなるだろう」というすばらしいフレーズを植木等のために書きましたが、こういうセリフがさらっと言える人間が「ぐるぐる回る」活動のハブになる。そういうのが理想の社会だと僕は思っています。

経験的に言って、自説の正しさを確信している人間は説明を好まない。「周知のように」とか「言うまでもないことだが」というようなフレーズを頻用する人間はこの類である。一方、自説の正しさの賛同者をひとりでも増やそうとする人間は情理を尽くして語る。知る限りの傍証を引き、使える限りの修辞を動員し、思いつく限りの喩え話を繰り広げ、なんとかしてわかってもらおうとする。とりすがるように、懇請するように語る。それができるのは、その人が言論の行き交う場の判定力を信頼しているからである。そこにいる聴き手の知性を信頼しているからである。聴き手の判断力に敬意を抱いているからである。

「木で鼻を括ったような説明」が私たちを不快にさせるのは、そこで述べられていることが間違っているからではない（必ずしも間違ってはいない）。そうではなくて、そこに聴き手の知性や判断力に対する信頼と敬意の痕跡を見て取ることができないからである。「おまえが私の意見に同意しようとしまいと、私の意見の真理性は揺るがない」と耳元で怒鳴りつけられ続けていると、私たちは深い疲労感にとらわれる。それはその言い分が実践的には**「おまえは存在する必要がない」という宣言と同義**だからである。「おまえなんかいなくてもいいんだ」と言われ続けていると、その呪認は私たちの生命力を酸のように侵してゆく。